展勝地風土記

Vol.12

平成27年4月24日

展勝地開園100周年記念事業準備委員会
問い合わせ／北上市都市整備部都市計画課☎72－8279

展勝地開園100周年記念事業準備委員会は、100周年に向けた取り組みとして、展勝地をより深く知っていただくため、さまざまな情報を紹介しています。

本年度1回目は、4月から指定管理者制度を導入した「みちのく民俗村」について、開村時に行われた炉端フォーラムの内容を紹介し、当時の関係者の民俗村に寄せる思いを感じていただきたいと思います。

次回は7月24日に発行します。

『みちのく民俗村を考える』

アニメ映画「となりのトトロ」を観て

郡司　民俗村のモチーフとなるようなアニメ映画「となりのトトロ」をご覧いただきましたが、この映画は一口に言うと「大人が失くしてしまった能力を持っている子どもの世界」を描いているという感じがします。

高橋　どろ亀さん[※1]はだいぶ前から「二度ワラシ（年老いて再び子どもに戻る）」になっているから…。とっても楽しい世界が描かれていました。

佐々木　子どもたちが伸び伸びと豊かに成長する様子、そのためには三つのことがあるのではないかと思いました。一つはなんといっても豊かな自然に直接触れることができること、それから家庭ですが、三世代がお互い思いやりの心で暮らしている。隣近所との関係もいいですね。これはまさに昔の村が持っていた三つの特徴です。その中でこそ子どもたちは伸び伸び成長する…。

小林　アニメの中に草むらのある堰（せき）とか井戸ポンプとか、誘い水を入れて水をくみだす井戸なんか今の生活から忘れ去られてしまったものの再現でした。おばあさんの話もいいですね。子どもの頃（祖母が）毎晩昔話を聞かせてくれたんです。その話にお化けが出てくると、家の中にいるんじゃないかと思ったりして…。それから今は闇を体験することがほとんど無くなりましたね。どこにも外灯がついて。私は闇にあこがれ山へ出掛けることがあるんです。

軽石　人はいつも良い生き方を求めています。そのために昔のものを捨ててきました。昔のものでも良いものは良い。例えばこの炉端で炭をおこして火にあたりたいと思っていても、そうやって生きている人はほとんどいないし、またやりたくてもなかなかやれない。その思いをどうしたら解決できるか…。

本堂　民俗村に子どもたちが遠足にきますと、「この家はどんな家か」ということよりも「池に入ってみたい」とか「石を投げたい」とかで一生懸命なんです。この間民家の軒下でアリジゴクを見つけましてね。それを見てワッとみんなが寄ってくるんです。子どもたちには私の理解できない感性といいますか、そういう気持ちがあるような気がします。この子ども達を見ていると、自然の素晴らしさとか、人間というか先輩の素晴らしさというか、そういうものをいつまでも失わないでいることが大切じゃないかと思いました。

「村」とは何か

郡司　いま日本中で都市化が進むなかで、風景とか景観ばかりでなく、心の中まで変わっていくのではないかという気がします。その中で「村」のもつ意味は何なのか話し合っていただきます。

佐々木　「木」を大事にすることですね。木の間に見え隠れする民俗村の民家はとても素晴らしいと思います。私の生まれた沢内村の山の神様の境内に「草木供養塔」が立っているんです。つまり草や木にも魂がある。それに感謝を込めての供養塔を建てたわけですね。

小林　私は温泉場の暮らしから17年前に現在の湯ノ沢[※2]という48軒の小さな集落に移りました。村というのはものすごい絆があるんだなあとつくづく感じました。「結（ゆい）っこ」という相互扶助の組織がありまして、村はこれなしでは成り立ちませんね。絶対必要なものと考えています。

炉端フォーラム参加者
- 高橋延清（みちのく民俗村村長）
- 佐々木政蔵（北上史談会長）
- 小林輝子（俳人）
- 軽石昇（バザール街道107実行委員長[※3]）
- 本堂寿一（市立博物館副館長）

〔司会〕
- 郡司直衛（みちのく民俗村まつり実行委員長）

※役職等は当時のものです。

※1　みちのく民俗村の高橋延清村長のこと。ここでは自分のことを言っています。
※2　西和賀町沢内。
※3　民俗村開村当時、国道107号線沿線の市町村の団体などが参加して行われていた交流会。

軽石　当初はトトロの世界のように純粋な村が存在していたのが、その後権力が集中するようになり、連帯ばかりでなく反対のものも出てきたのではないか。力が誰かに集中するとき、村は嫌な村になるのじゃないでしょうか。「結っこ」も良い側面と同時に、それから逃れたいという側面も持っていると私は感じてます。その二面性を整理して良い面だけを残す生き方はないものかと考えています。

本堂　生活の便利さは「町」ですね。「村」が発達すると「町」になるわけですが、「村」の良さは広い大地に根を下ろしていて、その恵みによって育まれてきたということでしょう。大地に足を踏まえているという点から考えると、日本人らしい日本人というのは「村」から育ってきたんじゃないかと思います。「村」が町に発展したとしても、あくまでも原点は村に求めるべきと考えます。村の建物は山から取った木や土、草を素材にして、縄文から弥生そして現代へと長い間続いている。アメリカ的な考え方からすれば、物の進化は押しとどめるべきじゃないということですが、日本人は古いものにこだわって、それを大事にするという考え方です。ですから日本人を考えるに先人が暮らした「村」を思い出すことが大事ではないかと思います。

高橋　確かに村には良い伝統はあるけれども、それから逃れたいという側面も持っている。自然の法則には陰と陽があるように…。それをどう克服して日本の村を理解させるかが課題です。子どもたちに村の良さを教えていくには、もっと自由に遊ばせるべきだ。

これからの民俗村

郡司　「みちのく民俗村」が、10年の歳月を経てここに完成しました。村の今後について話し合いましょう。

本堂　私が勤め始めた昭和48年当時はかやぶき集落が多かったのですが、だんだん少なくなるものだから残すべきだということで昭和58年に保存に向けスタートしました。ここはちょうど南部藩と伊達藩の境界ですから、両藩の古民家を集めるには条件が良かったんです。私たちの先祖が暮らした立派な文化財を1棟でも多く広い範囲から集めようと移転復元をやったわけですが、移築するだけでは廃屋の展示会になるだけで、その建物を活用することが大切です。ご飯を炊いたり寝泊まりしたり、市民に開放して昔の暮らしを少しでも学ぶこと。民俗村は市民の体験学習の場をベースに観光施設としてもPRしようと考えているわけです。

軽石　ここは子どもの頃よく遊んだところで思い出が詰まっています。観光客の受け入れでは大型バスよりも、小グループの人たちを良い形でいつでも迎えるような「村」にできればいいなと思っています。「村会議」のような組織を作り私たちの知恵とボランティアの協力で楽しい運営をやって欲しいですね。

高橋　私はこの村は「ゆっくり・ゆったり」でいきたいと思う。今の社会はハイスピードで忙し過ぎる。これからの日本を背負う子どもたちにとってゆったりと楽しく遊びながら歴史や社会を学ぶ場所になればいい…。

小林　展示している民俗資料の活用も大切ですね。例えば菅原家住宅に展示の「根舟（ねぶね）」。あれはワラビの根からでんぷんを取る道具です。どういうふうにして取ったか、その技術をいま残さないと永久に分からなくなってしまう…。また各地方には独特の食文化が残っています。おソバ一つ見ても打ち方の違いがあります。地方の特色を生かした食物を作るのもいいんじゃないでしょうか。

高橋　食物の話、とても良い提案でした。ですが今のスタッフではとても実現が困難です。支えてくださるかたがた、ボランティア組織がぜひ必要です。民俗村では本物の体験をしていただきます。例えば電気じゃなくランプで生活するとか…。森の世界には生と死が同居している。それを子どもたちに体験させることが大切だと思うね。

佐々木　この場所はものを考えさせてくれる大事なところです。昔から心を落ち着かせる良い場所だった。だからこそ北上川の東には極楽寺があり、白山寺や大竹寺があった。そこに民俗村ができたわけですからね。人間は自然条件の中で、いかに知恵を出し合って努力を重ねてきたか。そういうことを考えさせられる民俗村です。

高橋　皆さんのとても良いお話を聞きました。それをどう実現して行くか、ドロ亀さんはある日こっそり現れて、自らこの村で体験をし、皆さんの素晴らしいご意見を自ら消化して、夢の未来の実現にいささかでもお役に立ちたいと思っています。

【出典】
『街・きたかみ第117号』
平成4年11月20日
(有)みちのく民芸企画発行

北川家のいろりを囲んで行われた炉端フォーラム